

俺は。

俺は今何をしている。

上田の城の自室で、真田幸村はゆらりと揺らめく灯火を前に腕を組み考えていた。

戦場で突然自らを心身共、公私に渡り、導いて育て上げてくれた主であり師である信玄が倒れ、武田を託されたのだ。

将は元より、甲斐の民までもを。

ううん、と一つ唸ると幸村は頬をばんばんと叩き、気合だ、気合！ と前を向く。

今、幸村は迷っていた。

自分の進む先が見えぬ、と。

主に対する忠誠と、生来己に備わる激情のままに突き進み、振り返れば、自分一人、こんなにも遠くまで来てしまっていたのだ。

戦場であればどれ程遠かろうと武田騎馬隊を率いる武将として、いか程の距離でも駆けつけようというものだが、追う背中を失い、纏めるのはせいぜい真田隊という自家の軍門にいる武将や兵と、佐助を筆頭とした真田忍隊のみだった幸村には、一度に襲ってきた甲斐を守る、率いる、という重荷は、相当な重圧を感じるものになっていた。

お館様―信玄―の意思を継ぎし者として、甲斐の虎の名に恥じぬような采配をと思えば思う程、それは空回り、幸村の自信を失わせた。

配下の忍である佐助が「大将」と言う度に、俺は大将などではない、と口を吐きそうになる言葉をぐつと飲み込んだものだ。

大将と言われるたびに苦々しい思いが胸の中を埋め尽くし、それでも、そうなのだ、俺は今大将なのだ、と無理矢理に自分を奮い立たせる。

何故なら、総大将たる信玄は病の床に伏せり、命に別状はないものの、現地での采配は無理な状態であり、事実上の大将は他ならぬ幸村なのだから。

思えば思う程、自分の立場は重く重く、幸村の肩に押し掛かる。
大将、総大将……。

ああ、俺には到底無理な事なのだ……！
そう考えて、ふと、総大将と言えば、とかの鮮やかな蒼を纏った御仁は、と思ひ出す。

あの方は、俺と同じ歳の頃には既に総大将になっておられたのだな、と考えて、開け放った障子越しに見える夜空に浮かぶ月に目を遣る。

折りしも仄白く輝く月は三日月で、まるであの方のようだと、苦々しげに眉間に皺を寄せて

いた幸村の表情を、一瞬和ませた。

あの方は、このような重圧に耐え、なお領民を守り、この日の本を魔王から救い、そして、天下を狙っておられるのか。

自分は、自分とは、随分と違いすぎると、再び幸村の眉間に皺が寄る。そして、思いを馳せる。

弦月の前立てに蔽つい刀鏢の眼帯。鋭いその隻眼は好戦的であり、慈しみ深い色を時折宿す。低く掠れた声で、異国語を流暢に扱い、激しい剣戟と苛烈なる雷を身に纏い、俺を、俺の、魂を激しく揺さぶるのだ。

まさに、雷に打たれたように、俺は、一瞬にして魂を奪われたのだ！

お館様に命ぜられ、馬を駆り、闇を抜けようとしていたその時、頭上にかかる月よりも眩しい蒼が見えた。

あれは、と思い、思わず馬を止めた。

深い闇の中にあってもなお輝く蒼を纏った人を、その額に煌めく月をあしらった人を、噂にて聞き及んでいた奥州筆頭、その人なののだと思い、俺は問いかけたのだ。

応えは「是」であって、かの人は好戦的な一つ目を細め、俺に、武田の赤いの、と屈辱的な呼び様をしたのだ。

けれど、かの人は、蔑称した己相手にも拘わらず、いきなりその腰の大業物を全て引き抜き、全力で対峙して下さった。

その、武人への銜いのない態度と、相手の身分を問わず、力あるものには自身の全てで応じようとする気概。

そして、何と素晴らしい剣戟、力。

纏った雷はなお一層己の炎を燃え上がらせ、数々の戦場に出ては勇名馳せ、日の本一の兵と呼ばれた幸村を、かつてない程に滾らせたのだ。

あの時、確かに自分の魂は震え、雷で打たれ、信玄への忠誠心以外の、己の身の内にある全てを持っていかれたのだと思われた。

——……ああ、政宗殿……！

幸村は思い描いていた人物——奥州筆頭伊達政宗——を心の内で強く呼んだ。

魔王を打ち倒そうと共闘した折、その幾数日前に、種子島によつて傷ついた政宗を、武田の屋敷で近く見ることが出来た幸村は、戦装束を脱ぎ、兜を外した政宗の、天駆ける竜とはまさにこの事か、と思うような美しさと清廉さに、一層心強く惹かれ、信長を打ち倒したあとに伊達軍が奥州へ引き揚げたあととも忘れられず、幾度も幾度も奥州へ手紙を送り、何度も請うて、目通りかない、そして、自分の思いを告げたのだ。

愛しいのです、と。

政宗は驚いていたが、アンタの眼を見てりや分かつたぜと言ひ、幸村の思ひを受け止めてくれたのだ。

それから、暇を見つけては幾度も奥州へ通ひ、政宗と手合わせをしたり、意外な事に趣味だと言う料理の腕を揮ってもらつたりし、それに舌鼓を打ち、佐助に、竜の旦那のところから帰つてくると、旦那ちよつと顔が丸くなつてるよね、などと揶揄われたりしたのだ。

また、時折気の強い言葉を発する政宗の甘やかな唇に、己の唇を押し付けたりもして、その度に朱に染まる頬を愛しく見遣つたものだった。

そして、忘れもしない。

通いつめて数ヶ月過ぎた頃、あの幾重にも着込んだ戦装束の下の肌を、初めて、見て、触れて、聞いたことのないような音色の声を聞いたのだ。

愛しさが募り募つて、己の中の激情の炎がとうとう理性を焼き切つた瞬間だった。

もうこれ以上はない程に神経が張り詰めて、信玄に上奏する時にも劣らぬ程汗をかき、指先は冷たく強張り、眼には情けないことに涙まで浮かんだ。

そして冷たい床に己の額を擦り付けて懇願したのだ。

——どうぞ、今宵ご無礼仕りたく、と。

奥州という北国ゆえなのか、白く滑らかな素肌は、己のつけた槍傷が数箇所と、宵闇の中にあつても、頑なに隠したがった疱瘡の痕があり、それでもそれが触れるたびに熱を持ち、うすすらと浮き上がっていく様を見れば、何故そんなに隠したがるのかと疑問に思う程美しく艶かしく、なお一層幸村を煽つたものだった。

桜色に染まつた肌に、それよりも濃い紅梅色に浮き上がる槍傷と疱瘡の痕に、まるで挑むように己の政宗への愛しいと言う思いを刻みつけたのだ。

しつこいと厭われる程、吸い付き噛み付き、終いにはあの気丈な政宗が泣き出す程、紅く紅く、自分の戦装束の色を、己の分身である炎の色を、その身に写し取らせたかのような紅色の痕を刻みつけた。

そして、たおやかに撓る背を搔き抱き、甘やかに響く吐息を吸い上げ、細い腰の奥深くを開いて、突き上げ、愛しさのままに搔さぶつたのだ――。

うっとりと思ひ浮かべてあらぬ方向へ思考が飛んでいた幸村は、頭を濡れた犬のようにぶるぶると振るうと、はあ、と溜息を吐いた。

ひゅう、と喉の鳴る音で目が覚める。

床についてからどれくらい時間が経ったのだろうか。

障子越しに差し込む光は未だ朝は遠くにあるという様子で。

丑の刻あたりか、と見当をつけると、政宗は俄に汗をかいた寝間着の衿を開き、風を通す。

枕元に用意されていた水差しから一杯水を注ぎ、喉を潤す。

はあ、と一息吐くと久しぶりに見た、辛く、苦しい頃の夢を思い出す。

——母上は、俺を、相当嫌っておられたな……。

悲しく辛く世の中を悲観して過ごした幼少時代を思い出し、再び胸を掻き毟りたくなるような苦いものがせり上がってくる。

ぶるぶると震えが起き、悲しくて、堪らなく切なくなる。

人肌の温もりを知ってしまった今、このような悪夢を見たあとに、かいた汗が冷えてくると、……それは余計に顕著になった。

暑苦しくて、一緒にいれば、ちよつとは離れると押し返すぐらいのあの体温が、今、物凄く恋しいと思った。

奥州王として、家臣からは筆頭として担ぎ上げられ、崇められるような立場の俺が、と鼻白

み、Hai と一笑する。

あの恐ろしい母親から受けた仕打ちを、それに黙って耐えるしかなかった己の弱さを、そして、今の立場になるまでに繰り返した、悍ましく凄惨な所業をしてきた自分を、責め立て、脅し、今ここで腹を切れ、と言わんばかりの夢だった。

普段、現在の、奥州筆頭となつてからの伊達政宗と言う自分では億尾にも出さない心の底にある根深いものが、全て一気に噴出したような夢だった。

こんな夢、最近見ていなかったのにな。

そう独り言ちると、政宗は障子を開け、月明かりの中にここ最近の出来事を思い出した。

伊達も、甲斐武田と同じように、見るも無残な敗戦を喫していた。

敗走して自国に戻ってみれば、奥州伊達敗戦の報せと共に大人しくしていた地方領主たちが一斉に刃向い始め、一時は平定した筈の自領が、最も自分にとって危険な場所になってしまったのだ。

それを何とか武力と生来の情深い裁量で乗り切り、やっと、奥州を平定し直したところだった。

そう、まるで、片目を病で失くし、見るのも悍ましいような傷痕を抱えた己を、それでも、伊達家嫡男よ、次期当主はお前だぞと、慈しみ愛してくれた父を、致し方ない理由とは言え自

分で討ち、血で血を洗い、己の刃と信念だけでもって奥州統一を成したときのようにな。

そして念願叶い、あとは伊達軍に手痛い一撃を与えた石田三成を打ち破れば、落ち着いて天下取りに乗り出せると、漸く一息入れた時期なのだ。

だからなのか、久し振りに戦続き、政務続きで、疲れていたのだろうか。

憎しみを纏い、復讐の鬼と化して打倒石田を掲げ、鼻息荒くしていたところを、己の右目であり、右腕でもある小十郎に諫められた。

そして、こんなところで躓いている場合ではないと思ひ直し、先ずは奥州平定、そして石田打破、その先をこそ己の真の頂として、激戦の旅に出たのだ。

その先、その先にこそ、己が最も刃を交わし無条件に戦いたくなる男がいたのだ。熱く、燃えるような目をした、あの男が。

あの男、……真田幸村——が。

出会いは最高だったと思う。

生きてきてよかったと、あの時程思った事はなかった。

ここ数年恒例の生温い武田と上杉の逢瀬のような戦に、横槍を入れてやろうと思つて馬を走らせていけば、夜目にも鮮やかな紅が横切つた。

貴殿は、と声をかけられ、いかにも、と応えた。

そして本能の命ずるままに、いきなり六爪を抜いたのだ。

「この男相手に一爪では無理だ」

と、奥州筆頭として常に陣頭に立ち、数多の武将と渡り合ってきた直感がそう告げたのだ。それは思った通りで、幸村は政宗の闘争心を煽り、力負けせず、やや単純なもの同様に渡り合い、なおも己の技の切れを高めるといったことをしてみせたのだ。

幸村は政宗にとってまたとない手合いだった。

夜が明けるまで刃を交わし、お互いに決め手に欠けたまま、幸村の配下だと言う胡散臭い忍に邪魔をされ、事もあるうに、己の右目にまで制止をかけられたのだ。

内心で *shit* と何度舌打ちしたか知れない。

こんなにも自分を昂ぶらせ、あの焼け付くような炎で炙り、消えぬ熱を胸の奥底に燻らせた男が、かつていただろうか。

いや、いない。

忘れ得ぬ印象を政宗はその胸に強く強く焼き付けられたのだ。

そう、まるで幸村が操る烈火の如く。

そして時が経ち、日の本全土を覆い尽くした魔王の悪辣極まりない所業を断ち切ろうとして、奥州伊達は初めて、他軍と組んだのだ。

種子島で負わされた傷を武田で癒させてもらったと言う恩義に応える意味もあったが、初めて自らの意思で、連合軍と言うものを組み、幸村と先陣を切ったのだ。

種子島で撃たれた折り、武田の屋敷で世話になっているときに感じていた幸村の熱い視線に、

最初は「俺が目の前にいるんで、仕合てエのか」と思っていたが、そのうちそれはただの Rival へ向けるようなものではないと、感じ始めていた。

だが、ここにいるのも一時の事だし傷が癒えればいくら温情賜ったと言えど、いつかは敵対するもの同士になるのだ。

なるべく深入りしない方が無難だと判断し、素知らぬ振りをしていた。

あの日、幸村が情けない事を言い出すまでは――。

思わず幸村の六文銭を掴んでいた。

俺が認めた唯一の Rival がこんなに情けない男だとは思いたくなかったし、何よりも沈む幸村の顔を見るのが嫌で。

辛辣な言葉で、それでも叱咤し、激励してしまっただの。

そして、気付く。

自分も、あの日妻女山で出会った時以来消えぬこの胸の燻りの意味を――。

何とも、自分自身が信じられなかったが、気になって仕方がない人間と言え、一も二もなく真田幸村だけなのだ。

これでは、認めざるを得ない。

それでも、やるべき事は、魔王打破が最優先だったのだ。己の恋心など、日の本に比べれば些細な事だった。

政宗は幸村に見せしめるようにその場で伊達軍を解散し、打倒魔王へ向けて単騎出陣したの

だ。

その行動に感化されたのか、幸村が後を追いかけてきて、息を吹き返したと確信した政宗は、いい顔してるじゃねェかと、一瞬見惚れた程だった――。

そして、日の本に束の間の平和が訪れた頃、上田から足繁くあの胡散臭い忍が忍びもせず通うようになったのだ。

無骨で、何の飾り気もない、あまつさえ書き損じすらそのままの文を携えて。

何通も何通も寄越し、毎回文面は同じ。

お慕いしております。どうぞ今このひと時、戦のない時期だけでも、某をお側に置いて下さいませんか、と。

時候の挨拶もありきたりで、政宗は自分の思いを棚に上げ、添削してつき返したり、この時期ならこの香を焚けよとか、この字はいいが、この字の留めが甘いとか、全くもつて幸村の文に対して無関係な返事を送り続け、のらりくらりと、揶揄い続けて遊んだのだ。

日の本が穏やかで、束の間の平和を謳歌している最中で、それはいい退屈凌ぎだった。

だが、何度もそれを繰り返す政宗に焦れた幸村が、時候の挨拶すら飛ばして、思いの丈のみを一言書き綴ってきた余りにも *Strait* な恋文に、捻くれ者の政宗は、一撃で胸を撃ち抜かれたのだ。

んんん、と苦しげに呻き声を上げた政宗が、どんどん、と幸村の背中を叩いて、結わえていない伸ばした後ろ髪を割りど強めに引つ張って幸村を漸く引き剥がしてみれば、うっとり目を細めた幸村が、先程政宗が手淫を施していた時とは全く違う男の顔をしていて、今度は政宗の方が下腹の辺りがきゆう、とせり上がるような感覚に襲われて、とろんと潤む一つ目を思わず閉じてしまう。

はあはあ、と忙しなく二人の吐息が籠る圍で、政宗に引き剥がされた幸村は、それでもまだ足りぬと言いたげに政宗の艶々とした黒髪が散らばる額を露にして、そこへ口付けを落とすと、堰を切ったように剥き出しの右目にもしつこい程唇を押し付け、舌を這わせ、更には吸い付き引き攀れたような傷跡の上を赤く染め上げてみせた。

それからはもう政宗の背筋が震えるたびに相好を崩しながら、再び額に、それから左の涙に濡れた臉の上に、鼻頭に、両の頬に、顎にと、びくびくと政宗の肩が揺れるのを樂しむように唇を押し当てては舌を這わせてみたりして。

それから、幸村が右の耳にそつと歯を立てて政宗殿、と内緒話でもするように囁けば、あ、あ、と政宗の口から濡れた声が上がリ、このまま致してもよかるうかと、お互いにもう止める術など知らないし、抗えるわけもないのに、それでもその気性ゆえなのか、政宗からは是

返事が欲しくて。

幸村は強請る声で、なあ政宗殿、と再び赤く染まる政宗の耳に吹き込んだ。

う、ん、と首を竦めていやいやとするようにして、けれども幸村の肩に置いた手をその首にぎゅ、と巻き付けるようにして自ら抱き付いた政宗は、 안타いつからそんなに意地悪くなつたんだと、微かな喘ぎのような声音で幸村の耳朶にがり、と齧り付いた。

「痛いござる」

笑いながらそう答えた幸村は、意地悪は政宗殿ではござらんかと反論して、口を寄せていた政宗の右耳からそのまま下へ辿って、今朝方己がつけた紅色の痕跡を上塗りするように、ちゅ、ちゅ、と音を立てて吸い付いていく。

綺麗にくつきりと浮かんだ政宗の鎖骨にも甘く噛み付いて、自分の頭のすぐ近くで、あ、と政宗の掠れた声が聞こえる。

幸村はそのまますり、と政宗の首元に頬を寄せて甘えた仕草をし、寄せた頬をそのままに、己の手のひらをびたりと政宗の左胸に当てると、ここから伝わってくる音が、鼓動が、某たちを惹き合ひさせるのですな、と至極幸せそうに呟いた。

そのまま少し顔を下げて、置いた手のひらを避けてびたりと政宗の平らな胸に耳を寄せれば、忙しなく動く心臓の音が聞こえて、政宗が生きてここにあると、この人の命の音が今ここにありと実感する。

この耳の下、手のひらの下に己を惹き付けて止まない、この運命の片割れとも言える美しい人の命の源があるのだと、酷く切なくなるような、それでいてとても安心するような、そして

殊更に愛しくなるような気持ちちが溢れる程に湧いてきて、政宗殿、とはつはつと忙しく吐息を零す政宗に聞こえているか分からない程の声音で呟くと、その存在の、その命の、政宗自身の、愛しさにありつたけの気持ちを込めて上下する政宗の胸に唇を押し付けた。

「愛しております」

口に上らせれば陳腐に聞こえてしまいそうだけれど、そう言わずには居られず、またそれ以外にどうこの気持ちを政宗に伝えれば良いのか、余りそういつた事への語彙が多くはない幸村は、その性格の如く真つ直ぐに燃える情熱を込めて政宗に告げると、耳を当て手のひらを当てていた胸の、愛しい、鮮やかな飾りに吸い付いた。

何度も何度もここが可愛くて気になって、政宗にそんな場所やめる、と言われても政宗を掻き抱くたびに繰り返し幸村が触れてきたせいなのか、近頃ではその場所への口付けや愛撫に否やはなく、受け入れてくれる上に、政宗自身も何かを感じ取るように、薄く色付く胸の飾りに幸村が舌を這わせ指で触れれば、あえかな声を聞かせてくれるし、触れば触る程薄い色が濃くなって、硬く尖り、幸村の五感全てを刺激して堪らなくさせるのだ。

そして今も。

片側を口に含み軽く歯を立ててみたり、広げた舌先でべろりと舐め上げたりしながら、つんと上向くもう片方の突起には己の無骨な指を這わせ、硬く尖ったところを掴んでみたり時々押し潰してみたりなどは、政宗のあ、あ、と切なげに上がる声に耳を澄ます。

そして時々思い出したように再び紅く残る鬱血痕を上乗せしていくのだ。政宗殿は某のござるといふ内心の情念を乗せて。

ふ、ふ、と引き結ぼうとしても開いてしまふ口元に自分の手の甲を宛がい、密かに濡れる吐息を零す政宗に、そんな風にして幸村が思うままに気持ちちをぶつけていれば、離すまいとびつたりとくつつけた己の腹にぐい、と下から返る反応があつて、更に幸村は笑み崩れた。

こうして政宗を愛しめば、恥ずかしそうに、けれども可愛らしく反応を返してくれるのが、堪らなく嬉しくて幸せだと幸村は思う。

自分によつて政宗がこうして感じ入っているのが酷く喜びを幸村に齎せて、尚一層深く強く愛しさが込み上げる。

そして、その気持ちのままに掻き抱いて、政宗をもっともつと自分に刻み込みたいし、政宗に己を刻み付けたいと思う。

ぐい、と政宗の持ち上がる前を幸村は己の腹で押し付けて、政宗殿、と未だ可愛らしく色付きつんと尖る胸の飾りを口に含んだまま声をかければ、ふ、う、と刺激で上がった色めく声と共に、何、やだ、真田、と途切れ途切れに政宗の抗議の声が上がつて、いやいや、と首を振つてはばさばさと褥に広がった政宗の黒髪が乾いた音を立てて、その様がやたらと扇情的で……。幸村は知らず知らずにやけに派手な音を立てて喉仏を上下させた。

そんな風に幸村は自分の飢えた劣情に恥ずかしい思いをしながらも、己の鼻の頭で押し開き合わせを割った政宗の薄絹を、一度顔を上げて両手でするりと政宗の尖った肩から落とすと、やはり目の前には薄く色付く雪肌、薄つすらと浮かび上がる幸村がつけた槍傷があつて、更にその上を占領するように槍傷よりも濃く色付いた口付けの痕が散らばつていて、今まさにこの瞬間、この美しい人は自分だけのものなのだと、形容し難い感情が湧き上がる。

そして肌臍させた政宗の薄く割れた腹に沿うように幸村は舌を這わせ、窮屈そうに下穿きを押し上げる場所へと指を滑らせた。

「あ、あ、あ、やつ、真田ア……ッ」

緩めた下帯から直接手を差し込み、薄く生えるその髪の毛と同じ色の叢を、こそ、と掻き混ぜて直に政宗自身に幸村の節くれ立った指が這えば、政宗のはくはくと開閉を繰り返す吸われ過ぎて紅く染まった唇から鼻にかかったような甘怠い声が上がった。

きゅ、とふるりと勃ち上がり露を零す政宗自身を掌で包み、緩やかに上下しながら、幸村は先程から時々上がる、政宗の甘やかな声に混じる己の呼び名への不満を零した。

「政宗殿、幸村、と」

あつあつ、やだ、きつい、嫌だ、とその蕩けた一つ目に生え揃う長めの睫毛に何とか張り付いていた涙がぼろりと零れる程顎を仰け反らせた政宗には届いているのかいないのか、もう一度幸村は強請る声で政宗の耳元へと唇を寄せて、そのこめかみを伝う少し塩辛い甘露を舐め取った。

「幸村と、……呼ん、でっ、下さ、らんか……っ」

政宗のしどけない姿に煽られて、みつともない程に息が上がっているせいで、はあはあと苦しい息遣いの合間を縫うような喋り方になってしまったが、何とか幸村はその懇願を政宗の耳へ届ける事に成功した。

あ、あ、とそれさえも刺激になるのか、頭を振る政宗が閉じていた一つ目を薄っすらと開き、まるで流すような視線を送ってきて、なあ、と甘える幸村の鮎色に濡れる円らな瞳と視線がか

ち合い、政宗は言われた言葉の意味とその壮絶な色気に気圧されて、かあつとこれ以上赤くなる事など無理だと思つていた頬を、更に染め上げた。

政宗の濡れた睫毛に縁取られた潤む一つ目に、視線を流して寄越された幸村もそれは同じで、煽りに煽られて、下腹で窮屈に藻掻く自分自身が更に、ぐ、と上向いてくるのが分かつて、堪らなくなつてしまふ。

う、う、と喘ぐような呻くような声を上げた政宗は、や、これ、きつい、と言いながら自分で下穿きを取ろうとしてゆらりとその細腰を揺らめかせ、更にそれが幸村を刺激する。

そうして下帯にかけた政宗の手を幸村は柔く押し止めて、政宗殿、と最後の懇願を試みた。

もう、きつくて辛くて、下穿きに擦られて自身が痛いくらいで、切なくて政宗は幸村のその優しい戒めに逆らえず、強請る視線を泣きそうな顔の幸村へ向けた。

「ゆ、き、むら、なア、苦しい」

あ、あ、と戒めながらも慈しむように落とされる幸村の唇に反応しながら、それでも政宗はゆきむら、と些か舌足らずになりながら、己を激しく求め愛しもうとして、我儂な願い事を言い募る、酷く恋しい男の名を呼んだのだった――。